

創作童話募集にたくさんの応募がありました

創作童話が紡ぐ子どもたちの想像力

令和6年度は「竜や恐竜」をテーマに全国から59作品の応募があり、そのうち市内からは21作品、市内高校生からも13作品が寄せられました。審査の結果、最優秀賞1作品と、優秀賞5作品を選出しました。

令和7年1月25日に表彰式を行い、審査員による講評のほか、作者本人による朗読で作品が披露されました。朗読からは、それぞれの作品に込められた思いが伝わり、会場は物語の世界に包まれました。



朗読で作品披露

話を書こうとした時、たまたま
台風のニュースを見たんです。
調べたら台風は全て左回り。
そこから話の着想を得ました。

最優秀賞「右まわりの竜太」

えきすときお さん



創作童話の審査・
講評を行いました

〈審査員〉

コマヤスカン（絵本作家）

田中聖子（三重大学、皇學館
大学非常勤講師、絵本専門士）

櫻井可美（三重児童文学の会代
表、亀山絵本と童話の会会員）

北川恵美子（亀山市教育委員会学
校教育課教育支援グループリー
ダー）

高重京子（亀山市立図書館長）

〈入賞作品〉

○最優秀賞

「右まわりの竜太」

えきすときお

○優秀賞（順不同）

「龍の涙」

おかてるあき

「りゅうのともだちづくり」

北村 絢汰

「竜の虫歯」

門倉 暁

「黒い竜と白い竜」

伊藤 凜

「ステラのしっぽ」

いっき

入賞作品は図書館の
ホームページに
最優秀作品は裏面
掲載しています



審査員による講評

亀山市立図書館では、柔軟な発想力による市民文化力を高め、子どもの読書活動の推進のために、子ども向けのお話（創作童話）の募集を長年続けています。令和5年1月の新館開館後は運営を図書館事務局が行う形でリニューアルしました。作品に対して丁寧な講評を心がけて行っています。

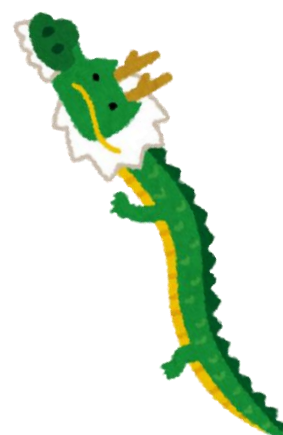
令和5年度の応募数は24点、令和6年度は59点で、約2倍に増えました。審査員の講評の中にも「亀山市の創作童話」が盛り上がりを見せてきた」という言葉がありました。

子どもたちにお話を書く楽しさを知ってもらい、書く際に気になったことを調べるなど、書くことに付随して本を読むことにつながっていくことがねらいの一つです。

たくさんのご応募ありがとうございました。令和7年度も募集します。ぜひご応募ください。

「右まわりの竜太」

えきす ときお



竜神の子、竜太は、おとなの竜のような神通力をもっていた。

いたずら好きで、自分でくるくるまわって、つむじ風をおこし、その風で村人たちを空にまきあげてたのしんだ。村人たちは、地面におちるまえにひとりのこらず、竜太の手でうけとめられた。

「また竜太のいたずらか」

人々は怒ったが、うけとめてくれることをしっているのだから、本気では怒らなかった。

「竜太」

ある日、竜太は父の竜神に呼びつけられた。

「なんだい、父さん」

「竜というものは昔から、空にまいあがるときは必ず左まわりになるものだ。おまえだけ、右まわりになっている。すぐにあらためろ」

「いやだよ。おれ、みんなとおなじことをするのがいやなんだ。みんなが左にまわってるなら、おれは、右にしかまわらない」

「ききわけのないやつだ」

父親は怒って、口から、ごおっと火を吐き出した。

炎が、赤いすじとなって空をはしるのをみた村人たちは、わらしべを手には、その火のゆくえをおいかけた。竜の吐く火は半月もえつづけるので、みんなはわらしべにもえうつらせてもってかえり、かまどや風呂のたきぎがわりにするのだった。

おおきな台風がちかづいていた。とおくの村では、はげしい風に木は倒れ、家々にもまた被害がでた。

その台風がもうじき、この村にもやってくる。人々はおそれおののき、なんとかならないものかと、竜神さまにお願いしに、森にでかけていった。

「それはだめだ」

村人たちのたのみを、あっさり竜神はことわった。

「いくら竜神さまでも、台風をしずめることはできませんか」

「台風をおそれているのではない。むしろ竜はみな、左まわりで空にあがる。台風もまた左回りだ。左に左では、ますます台風はおおきくなってしまう」

がっかりする村人をみて竜神は、ふと竜太のことをおもいだし、ただちによびよせ、わけをはなした。

「やってみよう」

いたずらはするが、人間がだいすきな竜太は、さっそく、空にまいあがっていった。

左まわりの台風のなかを竜太は、一生懸命右にまわりつづけた。台風はおとろえていき、やがておだやかな雨となって地上の作物をうるおした。

よくやってくれたと、ほめたたえる村人たちを、てれかくしもあつてか竜太は、また右回りのつむじ風をおこして、人々を空にまいあがらせてはよろこんだ。

